

流星 (日月星昼夜織分)

へそれ銀漢と唐詞に つらぬる五言七言の 硬い言葉を柔らぐる
三十一文字の大和歌 天の河原にかわらじと 深くも願う夫婦星
へその逢瀬さえ一とせに 今宵一夜の契り故 へまだ明星の影薄き
へ暮れぬうちより織女が 待てば待たるる牽牛も 牛の歩みのもと
かしく 心は先へ行き合いの へ八重の雲路を辿り来る へそれと見
るよりかさ鷺の 飛立つ思いおししずめ

へおなつかしや わがつまさま おかわりとてもあらざりしか

へおもえば年にただ一度 この七夕に逢うのみにて

へかりのたよりもなきみのうえ

へなつかしきは いかばかり

へとりわけ去年は雨ふりて そもじにあうも三年越し

へしかもつずきし長雨に 八十の河原に水増して 妻こし船に棹き
せど とわたるよすが明け近く 長鳴き鳥に短夜を 思えばうしと
引く綱も へ跡え引かるる後朝に つれなき別れも昨日とすぎ へ
たし へ今日は雨気もなか空に 心も晴れて雲の帯び 解けてぬる
夜の嬉しさと 寄り添う折から闇雲に

へ御注進く

へ呼ばれる声も高島や 飛んで気軽な流星が へ丸い世界へ生まれ
しからは 恋をするのが特鼻禪 寝るに手まわし宵から裸 ぞつと
夜風にハッハッハックサメ 彼奴が噂をしているか エエ畜生めと夕闇
を 足も空にて駆け来たり

へ誰かと思えば そちや流星

へ注進とは何事なるか

へ様子はいかに

へハハハッ

へさらば候そろくくと 三つ合わせてさん候

へおよそ夜這いと化け物は 夜中のものに宵の内 ところくやろうと
思いのほか 一つ長屋の雷が 夫婦喧嘩の乱騒ぎ へ聞けばこの夏流
行の 端唄の師匠へ落つこちて 気は失なわねど肝心の 雲を失い
居候 へそこで端唄を聞き覚え この天上へ帰つても つい口癖にな
るときも へ小町思えば照る日も曇る 四位の少将が涙雨 へごろ
くくくくくく ごろ ごろ エエごろくく へ聞く女房は呆れ果て

マコレそんなのろけた鳴りようでは 恐がるお臍で茶を沸かそう

鳴るなら大きな声をして へゴロくくくく へピカくくくく へゴロゴ

ロくく へピカくくくく へゴロくく へゴロくく へピカくくくく へゴロゴ

ガラ／＼／＼／＼。ピシャリイッ ト鳴らねばさまを付けられぬ
ト言えば亭主は腹を立て それは昔の雷だ 大きな声で鳴らずとも
粹に端唄で鳴るのが当世 それがいやなら

へ出て行きやれ

へなに出て行けとは

へオオサ角を見るのも アア厭になつた

へ我がものと思えば軽し傘の雪

へ我がもの故に仕方なく 我慢をすりゃつけ上がり 亭主を尻
に引きずり女房 サア恋の重荷の子供を連れ きりきりと出
て行きやれ

へいえ／＼／＼ここは私の家

へお前は婿の小糠雨 傘一本もない身の上 へ汝そうぬかせば了簡
がと 打つてかかるを へゴロ／＼／＼ へゴロ／＼／＼と鳴る音

へ傍に寝ていた小雷 コヨ／＼／＼と起き上がり

へコレ父さん 可哀想に母さんを

へ背負つた太鼓じゃあるまいし 何でそのようにたたくのじゃ 堪忍し
てとコヨ／＼／＼ へかかる騒ぎに隣りから 婆雷が止めに来て

へママこれお前方はどうしたのじゃ 夫婦喧嘩は雷獣も 喰わ

ぬに野暮を夕立は どんな太鼓の八つ当たり 出て行との一

声は

へ月が鳴いたか時鳥 いつしか白む短夜に まだ寝もやらぬ手枕や

へアレおなるさんもくよ／＼と

へ愚痴なようだが コレマ泣いているわいな 端唄に免じて五郎介ど
の 了簡見してと ゴロ／＼／＼

へいえ 私や打たれたからは 了簡ならぬと ゴロ／＼／＼

へならずば汝と ゴロ／＼／＼

へ父さん待つて コヨ／＼／＼

へこれはしたりと ゴロ／＼／＼

へ止めるはずみに雷婆ア ウンとばかりに倒るれば へこりゃころり
はあるまいか へ医者よ針医と立ち騒げば 入れ歯の牙を飲み込んで

胸につかえて苦しやと 言うにおかしく仲直り 夫婦喧嘩のあら
まはは かくの通りと手ぬぐいであせをぬぐうて居たりける へ織女

は更ゆく小夜風に名残りを惜しむかこちごと へ仲をへだて、流星がこ
れはどうしたもんくやら口説は ササラサラリットほうき星にてはき
いだし へサア／＼早くお床入り これから我らも色まわり へ西へ

飛うか東へ飛かどちへゆこうぞ 思案橋 へうかれうかるる足の下
つき出す鐘は浅草か へ雲の上野の明六ッに南無さん夜明に

へこのなりでは
へハやおさらば
へさらば
へ虚空はるかに失せにけり